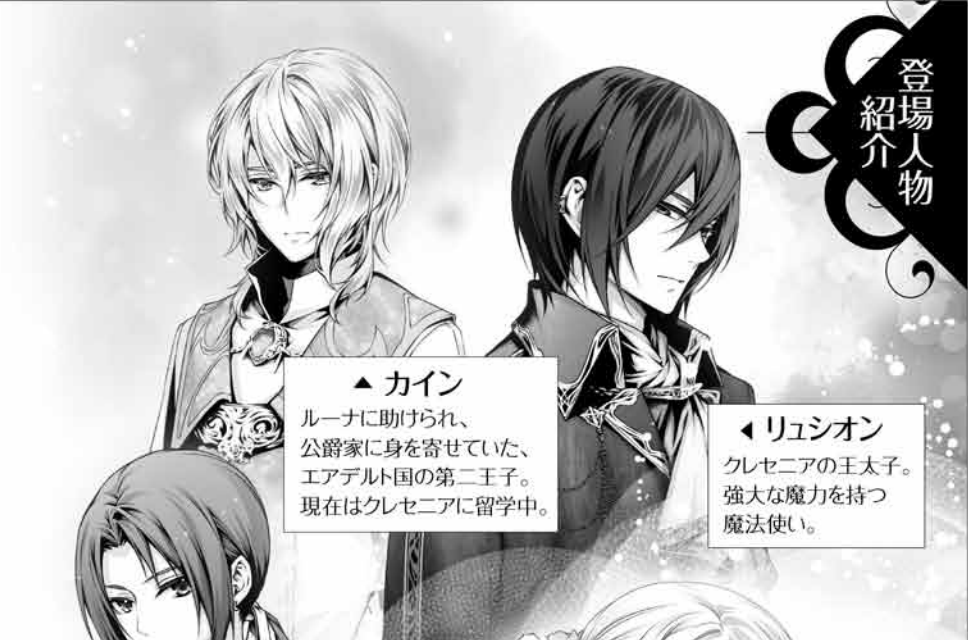


リ
セ
ツ
ト
13



▲ラウル▲
ルーナたちの前に
たびたび立ち塞がる
魔族。

▲ネイディア
リュシオンの異母妹で
ある、クレセニアの王女。
魔族と共謀し、何か企ん
でいるようで……？



▲カイン
ルーナに助けられ、
公爵家に身を寄せていた、
エアデルト国の第二王子。
現在はクレセニアに留学中。

◀リュシオン
クレセニアの王太子。
強大な魔力を持つ
魔法使い。



◀焔王▶

◀水姫

◀レグルス

▲風姫

シリウス▲

ルーナの守護者たち



▲フレイル
魔法師団に所属してい
る、精霊使いの青年。
他人にはその力を秘密
にしている。

ルーナ▶
千幸が転生した姿。
リヒトルーチェ公爵令嬢。
前世の記憶と強大な魔力を
持ちつつ人生やり直し中。

千幸(享年18歳)▶
超不幸体質の女子高生。

第一章 無慈悲な目覚め

あなたは、忘却と否定の辛さを耐えられますか？

ふと、ルーナは目を開いた。

「ここは……」

彼女は、ゆっくりと身を起こすと軽く頭を振った。

寝起きたが、意識はしっかりとしている。しかし、自分の状況について認識はできていない。ベッドに寝ていたことはわかるが、そのベッド自体、彼女には見覚えのないものだった。

「確か……」

ルーナは、自身の額ひたいに手をやると、両目を閉じて記憶を辿る。

脳裏に浮かぶ最後の場所は、ヴィントス皇国のソイルだ。その領主館の庭園で開かれた、ネイディアと二人だけのささやかなお茶会。

そこで談笑していた時、二人の前に突然、魔族が現れたのだ。

その魔族——ラウルは、フレイルやユアンの抵抗など意味をなさない圧倒的な力で、その場を一

気に制した。

だが、ルーナの持つ神宝によって、ラウルの魔力を封じること成功。今度はこちらの反撃だ、という場面だった。

もう一人の魔族——バルナドという過去、何度も彼女たちを苦しめてきた男が現れたのだ。バルナドの攻撃によって、ルーナは神宝を手から離してしまふ。その上、衝撃によって意識を失ってしまったのだ。

そこまで思い出し、彼女はハッと辺りを見渡す。

「しいちゃん、れぐちゃん？」

常に自分に付き添ってくれる、狼と獅子の聖獣たち。その姿がないことに、ルーナの胸に嫌な予感が過る。

けれど、敵がいるかもしれない場所で自身の正体を明かせないと考え、わざとルーナから離れている可能性もある。そんな事態を想定し、ルーナは必死に自分を落ち着かせた。

あの襲撃の後、フレイルたちが魔族を追い払い、安全な場所へ連れて来てくれたのか。それとも、魔族によって連れてこられたのか。

どちらもあり得そうな状況ではあるが、考えても結論が出るわけではない。

風姫たち精霊にしても、魔族の干渉によって近寄れないかもしれない。そのため、フレイルたちと一緒にいることも考えられる。また、彼らは日常的に、ふらりと姿を消すことは多いのだ。今もそうした理由で、傍にいない可能性もある。

(拘束されてるわけじゃないし、良い方に考えよう。でもまずは、ここがどこかってことだよね。誰か聞ける人がいればいいんだけど)

ルーナはそんなことを思いながら、改めて周囲を見渡した。

扉や家具はすべて白で統一されており、壁はクリーム色を基調に、金で細かな模様が描かれている。床には柔らかい色目の赤い絨毯が敷かれ、全体的に淡い色彩を持つ部屋のアクセントとなっていた。

部屋の中央に、ルーナが眠っていたベッドがある。他には、チェストやワードローブ、小型のドロワーテーブルなどが壁際に置かれていた。

どれも可愛らしいデザインのもので、部屋の雰囲気も含め、女性向けに設えられた部屋だと思われた。

ルーナは意を決すると、上掛けをめぐって床に足をつく。

ふらつくこともなく、しっかりと立てることにホッとしつつ、彼女はゆっくりとドレッサーに近づいた。

鏡に映るのは、多少寝乱れた自分の姿。

髪に結んでいたリボンが外れかけていたため、彼女はそれを外すと、置いてあったブラシで乱れた髪を梳いて整える。

服装は、ルーナの記憶にあるものと同じだ。着たまま寝たようだが、幸いにも酷い皺は寄っていないかった。

ルーナは簡単に身支度を整えると、廊下に続いていると思われる、白いドアへと近づいた。ドアノブに手をやり、そっと回す。

——ガチャリ。

意外なことに、ドアノブは簡単に回り、鍵がかかっていることが明らかになる。

「開いてる……」

ルーナはつぶやくと、緊張しながらドアノブを引いた。予想通り、ドアはあっさりと開く。恐る恐るドアの向こうを見ると、そこは廊下で、向かい側にもいくつかドアが並んでいた。

「窓があれば、外の様子がわかるのに……」

そんなことを言いながら、ルーナは廊下に足を踏み出す。

辺りの様子を見ても、やはり彼女には覚えのない場所だ。だが、少なくともソイルの領主であるユーリスの住む領主館ではないことはわかった。

隅から隅まで歩き見たわけではないため、彼女が知らない区間にある場所という可能性はある。

ただ、貴族の館においては、建物の様式に合わせて調度品を設置するのが一般的だ。

そのため、男性向け、女性向けなどのテイストの違いはあるものの、基本的な内装の雰囲気は似ている。ここはユーリスの館の内装とは趣が異なっていた。

それに加え、ソイルはヴィントス皇国の都市だ。当然、その館の建築様式は、ルーナから見れば異国の情緒溢れるもの。しかし、今ルーナが歩いている廊下や、先ほどまでいた部屋の様子はそれとは明らかに異なる。

むしろ、クレセニアやエアデルトの貴族の館に多く見られる内装だった。

(やっばり、両方の可能性があるよね)

ルーナは、目覚めた時にも抱いた可能性を、改めて考えた。

気を失った時にいたソイル。それとは違う場所で目覚めた理由について、良いパターンと悪いパターンの両方が考えられた。

良い方としては、魔族との戦闘により、建物に損傷があった等で、移動を余儀なくされたという場合。

または、魔族の再襲撃を警戒し、安全のために別の場所へと移ったという場合だ。そうであれば、ルーナは安全圏にいることになるので問題は無い。

悪い方としては、ルーナが魔族に拉致されたというものだ。

だが、部屋や廊下を歩いてみただけでは、そのどちらの状況かなどわからない。

現在の場所も見当もつかなければ、それを訊けるような人の姿もないのだ。

「人の気配がしないんだよね……」

助けられていたのなら、フレイルやユアンがいるはず。彼らが多忙で席を外していたとしても、侍女などが傍に待機しているのが通常だ。だが、それらしい姿はない。

かといって、拉致されたのであれば、部屋に鍵すらかかかっていなかったのはおかしい。

なんらかの事情で鍵をかけることができないとしても、逃げ出さないように見張りがいて当然だろう。

しかし、廊下に出ても監視役らしき者の姿もないのだ。
(ネイディア様の姿もないし。もし拉致されたのだつたら、なんとか助けないとだよね。……これだけ自由に歩けるなんて、敵が油断しすぎてるように思うけど)

ルーナは、判断のできない状況に困惑しながらも、答えを探すしかないと廊下を進んで行く。そうして突き当たりに差し掛かると、彼女はその横に、階下へ続く階段を見つけた。

(……いきなり殺されるとかかないよね。でも、動かないと何もわからないし)

一瞬立ち止まったものの、ルーナは思い直して足を踏み出す。

彼女が一歩ずつ階段を下りていくと、踊り場を曲がったところで、階下の廊下が見えた。慎重にその廊下の先を覗き込むが、やはり人の気配はなかった。

「こんなお屋敷なのに、誰もいないってどういうこと？」

廊下の長さなどから、それなりの規模の屋敷なのはルーナにもわかる。

これだけの建物となれば、綺麗に維持するのも大勢の手が必要となるはずだ。それなのに住人どころか、他に使用人の姿もないのは不自然だった。

(ひよっとして、今は深夜とか?)

ルーナは、ふと思いついて首を傾げる。

目覚めた部屋の中に、時計らしきものはなかった。

その上、窓は分厚いカーテンで覆われていたため、外の様子も見られなかった。そのせいで、今が昼なのか夜なのかわからない状態だ。

普通なら、起きてすぐに外を確認しただろう。だが、わけのわからない状況に、ルーナも混乱していたのだ。今の今まで、時間について思いを巡らせることがなかった。

下階の廊下にも窓はなく、魔道具の照明があるだけなので、時間を知ることができない。

(もし、今が深夜なら、通いの使用人はこの時間にはいないっていう可能性もあるよね。……それにしても、思ったより混乱してたのかな。時間とかまったく気にしてなかったよ)

自分の不手際を後悔しつつ、ルーナは意を決して階段を下りきる。

そこで彼女は、外の音でも拾えないかと、立ち止まって耳を澄ませてみた。

しかし、この廊下は両側を部屋で挟まれているせいか、小鳥のさえすりすら聞こえてこない。

(とりあえず、どこからか外の様子を見よう)

ルーナは目標を定めると、一番近くのドアの前に立つ。そして、念のために白いドア板に耳を近づけてみた。

(何も聞こえない……)

しばらく待ってみても、中から物音はしない。

ルーナは、緊張しながらも、ドアノブに手をかけた。

すると、ルーナが寝ていた部屋と同じように、ドアノブはあつさりと回る。

最初に少しだけドアを開き、彼女はそこから部屋の中を覗き込んだ。

そこは、来客用の応接室といった様子の部屋だった。中央にテーブルとソファが置かれており、壁際にいくつか酒の並べられたキャビネットが設置されている。

(よし、誰もいない！)

ルーナは、すばやく部屋の中に入ると、音を立てないようにドアを閉める。

(まずは、外の様子ごと)

部屋の奥には、分厚い赤いカーテンが掛けられていた。

窓辺まで近寄ると、ルーナは窓の端に立ち、カーテンをそっとめくる。

予想した通り、そこには格子のついたガラス張りの大きな窓があった。

「朝……いや、昼？」

ルーナがつぶやいた通り、外は明るく、青空が見えている。

この部屋は庭に面しているようで、そこから整えられた庭園が見えた。ただ、建物の周りを生垣いけがきが覆っているせいで、敷地の外の様子はわからない。

「とりあえず、夜じゃないってことはわかったけど、ここがどこなのかとか、なんで人がいないのかってことは謎のままだね……いっそ、敵でもいいから出てきてくれたらはずきりするのに」

ルーナは、途方に暮れた様子で独りごちる。

とはいえ、彼女とて本当に敵に遭遇したいわけではない。あくまで誰もいないからこそ口をついて出た言葉だった。

しかし、そんな不用意な言葉が、時には『フラグ』を立てることになったりするのだ。

カーテンを閉め、室内の方を振り返ったルーナは、正面にあるドアのノブが回るのを見て固まった。

(う、うそ!?)

廊下を歩いていた時はそれなりに警戒していたルーナだが、ここまで何事もなかったために気を抜いていたのだろう。

彼女は、隠れることもできず、ただワタワタと周囲を見回した。

けれど、ルーナがそうしている間に、無情にもドアが開く。

「……ッ！」

息を呑むルーナの目に、ドアを開けて入ってくる女性の姿が見えた。

(あ、メイドさん……)

黒のワンピースに白いエプロンのお仕着せを着た女性は、立ち竦すくむルーナを無表情に見ている。

「あの、ごめんなさい。起きたら誰もいなくて……」

無言のメイドに対し、ルーナは言い訳するように早口で告げた。

しかし彼女は、その言葉になんの反応も示さず、表情すら変えない。

「あ、あの、ここはいつたい誰のお屋敷なんですか？」

なんとかコミュニケーションを取ろうと、ルーナはずっと持っていた疑問を口にした。だが、やはりメイドは無表情に彼女を見つめるばかりだ。

(メイドさん、いったいどうしたんだろう?)

不思議に思い、ルーナはメイドを凝視する。

メイドの顔色は悪くない。目はしっかりと開かれていて、まばたきもする。だが、その表情は恐

るしいほど『無』だった。

人形のように無機質な目は、向かいあっているはずなのに視線が合わず、虚ろと表現する方がしっくりとくる。

(もしかして、これって、操られてる?)

以前に会った、〈傀儡〉の魔法によって操られた人間たち——メイドの様子は、その時の彼らを彷彿とさせた。

とはいえ、ここでようやく出会えた初めての人間だ。そして、ルーナに対して危害を与える様子がないことから、彼女はダメ元ともう一度話しかける。

「……あなたの主人に会いたいのだけだ」

ルーナがじつとメイドの一挙手一投足を凝視して数秒。

しかしメイドは微動だにしない。

(せめて、何か反応がほしいんだけどなあ)

心の中でルーナがぼやく。するとそれに呼応したように、静止していたメイドが唐突に動いた。

メイドは口を開くことなく、クルリとルーナに背を向ける。そして、すぐ後ろにあるドアを開けて廊下に出た。

「え、ちょ……」

突然のメイドの行動に、ルーナは呆気にとられるが、すぐに後を追った。

ルーナが廊下に出てみると、少し先にメイドの姿があった。

その足取りは規則正しいものだが、ルーナには手足をプログラミング通りに動かすロボットのように見える、不気味に感じる。

(やっぱり、〈傀儡〉の魔法をかけられているのかな。でも、わたしのことはまったく眼中にないみたいだし、とりあえず危険はなさそうかな。じつといても仕方がないし、ついていつてみる……?)

この屋敷で遭遇した人間は、メイドの彼女だけ。冷静に考えれば、様子のおかしい彼女を追うのは危険で軽率な行動だろう。

だが、ここで立ち竦んでいても、状況は何もわからないままだ。

ルーナは、少しだけ迷ったものの、メイドが襲ってくるような気配がないことに後押しされ、後を追うことに決めた。

勝手に出歩いているにもかかわらず、放置されているのだ。それに、メイドの状態は普通ではないが、ルーナと敵対する者——魔族とは関係ない可能性もある。

(とにかく、彼女についていけば他の人がいるかもしれない……。でも、まだ魔族が関係してないっていう証拠もない。気をつけるに越したことはないよね)

ルーナは、キュッと手のひらを握りしめる。

そんな彼女を余所に、メイドは長い廊下を無言で歩いていく。そして、廊下の突き当たりに差し掛かったところで足を止めた。

「ここが目的地？」

ルーナがつぶやくが、やはりメイドからの反応はない。

メイドは、まるでルーナがそこいないかのように、気にせずドアノブを掴む。

ゆつくりと開かれたドアの前に、ルーナは咄嗟に部屋の中から見えないう、死角へ身体をずらした。

そのせいで、残念ながらドアが開かれても中の様子は窺うことができない。

だが、隠れているはずのルーナへ、中から声がかけられた。

「入ってきたらどうかしら？」

ルーナの耳に届いたのは、高く可愛らしい女性の声。

「え？」

聞き覚えのある声に、ルーナはハッとする。

そして、開かれたままのドアの向こうを、思い切って見た。

「ネイディア……様？」

ルーナの目に映るのは、布張りの長椅子に腰かけた少女の姿——クレセニア王国第一王女、ネイディア・ヨナ・クレセニアだった。

「そんなところで目を丸くしていないで、入ってきたら？」

「え、あ、はいっ」

ネイディアに促され、ルーナはメイドが押さえたままのドアを通り、部屋に入る。

大きなシャンデリアに大理石の床、華美な装飾を施された家具。敷かれた絨毯も見事な文様が描

かれたものだ。

そんな豪華な部屋の中央、暖炉の前の長椅子に座ったネイディアは、いつもと同じ穏やかな笑みを浮かべている。

「ネイディア様！ 無事だったんですね！」

思わず駆け寄るルーナに、ネイディアは笑みを浮かべたまま言った。

「ええ、無事よ。当たり前じゃない」

「ネイディア様……？」

表情とは反対に、驚くほど冷たいネイディアの声。

聞き慣れないネイディアの声音に、ルーナは困惑して足を止めた。

彼女は戸惑いのまま、まじまじとネイディアを見つめる。

「とりあえず座ったらどう？ いつまでも突っ立っていたらメイドの邪魔よ」

「あ、はい」

ルーナは慌てて言うと、ネイディアの向かいにある椅子に腰を下ろした。

「思ったより起きるのが遅かったわね。緊張感の欠片もなく寝ていられるなんて、本当にあなたって大物よね」

馬鹿にしたような——否、馬鹿にしたネイディアの言葉に、ルーナは反応すらできずに固まる。怒るより前に、豹変した彼女の様子に困惑してしまっただ。

ルーナが知っているネイディア——それは、王女でありながら謙虚で思いやりがあり、実の母親

に虐げられて育ったにもかかわらず、腐らず生きてきた女性だった。
気の弱いところはあつたが、それが庇護欲を刺激し、守らなければと周囲に思わせる雰囲気がある。

ルーナも例に漏れず、年上ではあるがネイディアは守る対象という意識が強かった。
そんなネイディアの、常にはない物言い。それに、ルーナが戸惑つてしまうのも無理はなかった。
「ネイディア様、あの……」

声をかけたものの、どう次の言葉を継いでいいのかわからず、ルーナは口を噤む。
それを見て、ネイディアはクスリと笑つた。

「まあいいわ。それより訊きたいことがあるんじゃないか？」

ネイディアに水を向けられ、気を取り直したルーナは一拍置いて口を開く。

「ここはいったいどなたのお屋敷なんですか？」

「あら、まずは無難な質問ね。いいでしょう、教えてあげるわ。ここはルシエ子爵の領主館よ」

「ルシエ……」

聞き覚えのない名前に、ルーナは心の中でつぶやく。

(ヴィントスの貴族じゃ、さすがにわかんないよね)

クレセニアの貴族の名前ならば、ルーナも把握していた。しかし、ヴィントスの貴族と言われれば別だ。

先日、ヴィントスの貴族年鑑を見る機会があつたが、その時は特定の名前を中心に見ていたため、

ルシエ子爵の名には気がつかなかった。

「ああ、一つ面白いことを教えてあげる」

「面白いことですか？」

「そう。あなたはここがヴィントスだと思つているようだけど、違ふわよ」

「え？」

ルーナはネイディアの言葉に、驚きの声をあげた。

「ここはキルスーナ大公国。どう？ 驚いたかしら？」

呆気にとられた様子のルーナを、ネイディアはおかしそうに見る。一方ルーナは、ネイディアから聞いた言葉が頭に浸透するのに、かなりの時間を要していた。

それもそうだろう。

キルスーナ大公国。

北側の国境の大半がエアデルトと接しているが、その東端の一部だけはクレセニアに面している小国だ。

東西に長い領土のほとんどは、山とそれに付随する森林区域。

主な市街は北側にある狭い平地に集中しており、山岳地帯との文化水準はかなりの格差がある。

洗練された建物の様子から、ここは恐らく平地の都市部——それも公都かそれに近い場所だと思われた。

キルスーナの君主であるキルスーナ大公は、もともとエアデルトの王族。大公位を持つキルスー

ナ大公が治めていた領地が、自治権を獲得してできた国だ。

それを思えば、建物の様式がクレセニアやエアデルトに見られるものというのも納得できる。

ちなみに、ヴィントスとクレセニア、エアデルトの間に位置する小国群には、このような大公が治める小国がいくつか存在していた。

ルーナは、驚きすぎて働かない頭で、さらにキルスーナについて思い出そうとする。

しかし、国についてのおおまかな知識はあれども、その国の貴族についてなど、よほどの有名人でなければ知る機会などない。

そして、なにより彼女が驚愕したのは、ヴィントス皇国にいたはずの自分が、ヴィントスから遠く離れた——むしろクレセニアに近い国にいたことだった。

〈転移門〉を使っても、クレセニアからヴィントスまで一週間はかかるはず。馬車ならもつとかかるのが普通だよな？ だとしたらわたしは、少なくとも一週間以上意識がなかったってことなの？)

先ほどまで、ソイルでの出来事は数時間前、あるいは前日のことだろうとルーナは考えていた。

だが、ネイディアの言葉をそのまま受け取るならば、ルーナが意識を失ってからかなりの時間が過ぎていくことになる。

(わからないが多すぎる……)

内心でため息をつき、ルーナはネイディアを見た。

現状では、ネイディアの他に、コミュニケーションが取れないメイドとしか会っていない。

となれば、普段とは様子が違うことを訝しみながらも、ネイディアから情報を与えてもらうしかなかった。

「ネイディア様、ソイルの庭園で魔族に会ってから、何日経っているのですか？ それにどうしてわたしたちは、キルスーナの貴族屋敷にいるのでしょうか？」

「そうねえ、あまりにもわからないことだらけじゃ、あなたも気持ち悪いでしょうね。いいわ、答えてあげる」

ネイディアは、恩着せがましく言って話し始めた。

「まず、あれからどれくらいの日にか経っているか、だったわね。それは簡単。今日はあれから二日目の昼よ。あなたは昨日一日眠りこけていたってわけ」

「あれから二日……」

ルーナ自身は、正確な時間経過がわからない。だが、今は昼中であることを鑑みれば、ネイディアの言うことは合っている。

だが、それと同時に、彼女の言葉に納得できない部分もあった。

この屋敷はキルスーナの貴族のもの。そして、ルーナが襲撃に遭ってから、二日もの時間が経っている。

襲撃が起こったヴィントスとキルスーナの距離を移動するには、ルーナたちのように〈転移門〉を駆使したとしても、二日はあまりにも早い。

「驚いているようね」

ふふつと楽しみに笑いながら、ネイディアが言う。
しかし、その言葉には隠し切れない侮蔑の色がある。普段とは違いすぎる態度にルーナは未だ戸惑っていた。

「まあ、ここがどこだなんて、たいしたことじゃないわ。それよりね、ルーナ。わたくしとても嬉しいの。だって、やっと本当の自分でいられるんですもの。これで、あなたに教えてあげることができるわ」

「ネイディア様、いったい何を——」

「そうねえ、まずは一つ」

ネイディアは、ルーナの目の前で人差し指を立ててみせる。

「わたくしはあなたの敵」

「え？」

呆然とするルーナに、ネイディアはニヤリと口角を上げた。

そして、固まるルーナに構わず、パンツと両手を打ち鳴らす。

次の瞬間、ルーナとネイディア、人形のように佇むメイドという三人だけの空間に、一人の男性が現れた。

「あなたはっ！」

その人物を見て、ルーナは立ち上がって声をあげる。

ネイディアの横に立ち、堂々とルーナの視線を受け止めた男。それは、ヴィントスにも現れた因

縁の魔族——バルナドだった。

「な、なんで、あなたがここに……！」

ルーナは、驚きと恐怖で震える声を絞り出す。

「ふふ……あはは……あははははっ」

笑みを浮かべてルーナを見ていたネイディアが、今度はおかしくてたまらないとばかりに哄笑した。

ルーナは、ネイディアの高笑いに目を見開き、呆然と彼女を見る。

人類の敵とも言える魔族。

その魔族を恐れもせず横に侍らせ、大笑いしているネイディア。

これらの光景が、何を示すのか、わからない者はいないだろう。

しかし、それでもなお、ルーナは理解できないでいた。否、したくなかった。

「ネイディア様、嘘でしょう……」

縋るようにつぶやかれる言葉に、ネイディアはようやく笑いを収める。

「嘘？ 何が？ ああ、ひ弱で優しいネイディアが、というのなら確かに嘘ねえ」

「どうして……」

「どうしてって、バルナドを見てもわからないの？」

困った子ね。と言わんばかりの顔で、ネイディアは肩を竦めてみせた。

(バルナド……この魔族とネイディア様は仲間だというの？ そんな……)



目の前の事実は、それが間違いようもないものだとしている。

しかしルーナの心は、到底それを受け入れられない。

零れ落ちる涙にも気づいていないのか、ルーナはただ駄々っ子のように首を左右に振った。

「ああもう、思ったよりつまらないわねえ。もっといろんな反応があると思ったのに。ねえ、バルナド？」

「そうですねえ。いや、それだけネイディア様の演技が上手かったということでは？ この様子ではまったく疑っていませんでしたよ」

「ふふ、そうね。わたくしが素晴らしすぎたってところかしら」

「そういうことですよ」

バルナドとネイディアは、顔を見合わせてクスリと笑う。

まるで仲の良い友人のような、気の置かないやり取りを目にし、ルーナは渦巻く感情を抑え込むように目を閉じた。

だがすぐに、ネイディアに強い眼差しを向ける。

「ネイディア様、この者が魔族だをご存知なのですね」

「ええ、もちろん」

「魔族が、人を根絶やしにしようとする者たちだとわかっていて、その横に立たせているというのはですか？」

唸るような、苦しげに絞り出されるルーナの質問に、ネイディアは天気でも訊かれたかのように、

軽い調子で是と返す。

「いいわね。ようやく少し楽しくなってきたわ」

ルーナの鋭い視線を、ネイディアは微笑で跳ね返す。だが、その微笑は、可憐な王女のそれではなく、どこか歪いびつで邪よこしまなものだった。

（目の前のこの人は、本当にわたしの知ってるネイディア様なんだろうか？ もしかしたら、バルナドに操あやつられてるんじゃない……）

ルーナは、そんな疑いを持つ。

（よし、ならイチかバチか！）

次の瞬間、ルーナはとある魔法語マジックスルを唱えた。

『ゲイル・ソナ・レアド・スレイ』

ルーナが唱えたのは、かけられた魔法を〈解除〉する魔法だ。この魔法は魔力消費量が多い上に、術者より魔力量が足りない場合は解除することができない。

ネイディアが〈傀儡〉などの魔法で操あやつられているのなら、それを施ほどこしたのは魔族のはずだ。

ルーナやリュシオンですら到底及ばない魔力を持つ魔族。そのバルナドがかけた魔法を、ルーナが解除できる可能性は低い。

だが、一部でも自我を覚醒させることはできるかもしれない。

やる価値はあるはずだ。ルーナはそう自分に言い聞かせ、魔法語マジックスルを紡いだのだった。

ルーナの澄んだ声が唱える魔法。

その魔法の効果を示すように、一瞬、青白い光がネイディアを包み込んだ。

間違わず魔法の発動を示す現象。しかし、光はそのままスッと消えてしまった。

「これは……」

術者にはどんな魔法にも限らず、その魔法が発動したかどうかはわかる。

先ほどの現象が示すのは、〈解除〉の魔法が発動したというものだ。にもかかわらず、何も起こらなかったのは、術の失敗、あるいは魔法が何もかかっていなかったため、解除自体必要なかったということだ。

つまり、ネイディアに〈傀儡〉といった類ないの魔法はかかっていない。

しかしそうなると、ネイディアが自分の意思で魔族と共にいるということになる。

「わたくしが操あやつられていると思っただけ。良い子のネイディア様は魔族と遊んだりしないってところかしら」

「おや、これは酷い偏見ですねえ」

ネイディアの言葉に、バルナドが面白そうに答える。

「あら、魔族は悪い子たちだ、というのは本当のことでしょう？」

「否定はできませんかね」

軽口を叩き合う二人を見て、ルーナはただ絶句するのみだ。

（悪い子？ 人をゴミのように見て、殺してしまうことすら躊躇ちゅうちよしない存在を、『悪い子』なんて可愛い表現で済ませられるわけない！）

ルーナは、怒りを隠さずネイディアをきつく睨みつける。

思い出すのは、魔族の企みによって魔物化させられた人たちだ。その中には、自ら悪の道を進み、自滅しような人もいた。

だが、なんの落ち度もない、善良な人間もいたのだ。

そんな非道な行いをする魔族が、『悪い子』で済まされるはずがない。

「バルナド。どうやらルーナが怒ったみたいよ？」

「おや。ですが、彼女が私たちをどうにかできるわけでもないでしょう」

煽るような二人の言葉に、ルーナは反射的に口を開く。

『エラン・リデ！』

ルーナの口から飛び出したのは、怒声でも叫びでもなく、攻撃魔法だ。

彼女の伸ばされた右手から、瞬時に現れる数本の氷の矢。それが、目の前のバルナドに襲い掛かる。

その瞬間、ルーナはハッと我に返った。

「あ……」

魔法で出現した氷の矢は、的確に対象者に向かって放たれる。その後は、たとえ術者が止めようと思っても止まるものではない。

魔法を放った後、ルーナが感じたのは恐怖。

バルナドは魔族だ。だが、現在彼女の目の前にいる彼は、人となら変わらない。

ルーナは、見た目だけとはいえ、人と認識できる者を殺すかもしれないことに怯えた。

けれど、彼女にとつて幸か不幸か——至近距離で放たれた氷の矢は、バルナドに辿り着くと思われた瞬間、何かに弾かれるようにその場で粉々になった。

キラキラと氷の粒子をまき散らしながら、氷の矢が消える。

ルーナは、その光景を呆然と見つめていた。

「相変わらずの甘ちゃんね」

言葉も出ないルーナに向け、ネイディアは侮蔑の視線と共に言い放つ。そんな彼女に、バルナドは大袈裟に肩を竦めてみせた。

「ああ、人を傷つける——否、殺す覚悟がないというやつですか」

「そう。守られてばかりのこの子に、そんな覚悟なんてないわ。実際、感情に任せて攻撃魔法を放っただけで怖がっているもの」

「まあ、この程度の魔法で私ができると思われたのは、少しばかり不快ではありますがね」
「あはは、確かにそうね。あの程度で魔族がどうにかなるわけがないわ」
楽しそうに言い切ったネイディアは、次にルーナに向けて手を伸ばす。

それは、バルナドに向けてルーナが攻撃魔法を放った動きを彷彿させた。

（魔法？ でも、ネイディア様は魔法が使えるほどの魔力も才もなかったはず……）

そう思うルーナを嘲笑うように、ネイディアが口を開く。

『オル・ディガーデ』

「え、嘘!？」

ネイディアの放つ〈拘束魔法〉に、ルーナは目を見開いた。しかし、その間にも彼女の魔法は、ルーナに迫る。

「……『ラノア・リール』!」

ルーナは、反射的に魔法を唱えた。

防御障壁を構築する、もつとも単純な〈防御魔法〉。咄嗟に唱えられたのはそれだけだ。だが、膨大な魔力を持つルーナであれば、それで大抵の攻撃から身を守るはずだった。

(う、嘘でしょう!?)

ルーナの張った魔法障壁と、ネイディアから放たれた靄が接触する。その瞬間、ルーナの施した防御障壁が、ガラスが散るように飛散した。

そして、そのまま伸びた靄は、ロープのような形になってルーナの身体を拘束する。

(動けない!? それに声も! 〈拘束〉の魔法にそんな効果は……)

意識はしつかりあるが、身動きはまったくできない。そして声すら出ない。

ルーナはこの状況に、混乱するばかりだった。

本来、〈拘束〉の魔法は、文字通り見えない枷。あるいはロープのようなものが、対象者を拘束するというもの。

とはいえ、縛りつけるだけなのだから、小さく身動きはできるし声も出せる。

だが、現在ルーナを拘束する魔法は、彼女の意思を縛るかのように、身体だけでなく声までをも

奪っていた。抵抗できないルーナを見て、ネイディアは楽しそうに笑う。

「いいザマね。さて、どうしてあげようかしら? 一思いに楽にしてほしい?」

「それも良いですが……ネイディア様、冥府への土産に教えて差し上げてはどうです? 貴女のことを」

「それも一興ね。いいわ、座りなさい」

ネイディアがルーナにそう言うと、彼女の身体からふつと力が抜ける。気づけばルーナは、後ろにあった椅子に凭れるようにして座っていた。

「わたくしが魔法を使ったことに驚いたのかしら? そうよね、たいした魔法も使えない、役立たずな王女だったものね」

代々魔力に恵まれた者が多いクレセニア王家。その最高傑作が、リュシオンといっても過言ではない。

彼のように、強大すぎる魔力がゆえに恐れられる一方、王家にそれほどの魔力保持者が存在することが、国の安泰にも繋がると歓迎されていた。

特に魔力暴走の危険性など知らない一般庶民は、単純に強大な魔力を持っていることが強者の証だと認識していたからだ。

王家に強者がいる——それは、自分たちの生活が守られるという護符でもあった。

だが、ネイディアの魔力は一般人程度。才もなく、魔法使いと呼ばれるには程遠かった。

身体も弱く、魔法使いの才もない——それを揶揄し、役立たずの王女と誇る者もいたのだ。

そんな自分の評価を、ネイディアはまるで他人事のように笑って口にする。それは、本当の自分ではないから言えるのか。

(彼女はいつたい……何?)

ルーナに芽生える疑問。

魔法語を聞く限り、ネイディアが使ったのは〈拘束〉の魔法で間違いない。けれどその効果は、ルーナが知るものとは違っていた。

また、世界的に見ても稀な魔力保持者であるルーナを魔法によって拘束できるとしたら、それは彼女以上の魔力をネイディアが持つことに他ならない。

けれど、それほどの魔力を持っているのならば、隠すことの方が難しいはずだった。「ふふっ、優しいわたくしが種明かしをしてあげる」

ネイディアは、混乱するルーナにそう言って語り始めた。

十

「そうねえ、何から聞きたいかしら？ ああ、喋れないのだったわ」

ネイディアはルーナに問うた後、思い出したように独りごちる。次いで、パンツと軽く両手を打ち鳴らした。

途端、ルーナは、自身を縛る何かが緩むを感じる。

「あ……」

声が出る。そのことに気づき、ルーナは自身の首に手を伸ばそうとした。しかし、自由になった声とは別に、身体はまったく微動だにしない。

「……魔法が使えるのですね」

ルーナがつぶやくと、ネイディアは「ええ」とうなずいてみせる。

「でも、最近まで使えなかったのは本当なのよ」

「最近？」

ルーナは訝しげに、眉を顰めた。

魔法が使えるかどうかは、先天的な魔力量と、魔法語を唱えることができる才による。

必要な魔力量が足りなければ、その魔法を使用することはできない。魔力量が足りていたとしても、その魔法語を紡ぐことのできる、『才』としか呼びぶようなない能力が必要となる。

そのため、白魔法と呼ばれる回復や支援に特化した魔法は得意なのに、攻撃に特化した黒魔法はまったく使えない魔法使いも多い。

なお、元々魔法を行使するために必要な魔力量を有している人間は少ない。魔力量に関しては、生まれもって定められている。

人生の中で使用できる魔法の種類が増えたり、あるいは、ほんのわずかだが魔力量が増減したりすることはある。

ただ、ルーナの前世——日本で遊んだゲームのように、『レベルアップによってMPが増加し、

気づけば初期値の数倍になっていた』などということは、サンクトロイメにおいてはあり得ないはずだった。

「ネイディア様、順を追って説明してあげなければだめですよ」

「そこまでしてあげないといけないの？」

「はは。もう飽きられたのですか？ 仕方のない方だ。では、私が」

バルナドは、クスリと笑うとルーナに向き直る。

「簡単に言うと、ネイディア様は生まれ変わったのですよ」

「生まれ変わった？」

目を睜^すめるルーナに、バルナドはうなずいてみせた。

「最初から教えてあげましょう。最初はそう、あの女。今は亡きキーラ王妃。彼女は、貴女が生まれる前から、我らと結託していたのですよ」

「生まれる前から？」

聞かされた事実^じに、ルーナは眉間に皺^{しわ}を寄せる。

キーラ王妃は、クレセニア王国の現国王バートランドの後妻で、ネイディアの母だ。

亡き前王妃の子であるリュシオンを疎^{うと}んじ、さまざまな方法で亡き者にしようとしていた悪女でもある。だが数年前、彼女に唐突な死が訪れた。それは、何者かによる毒殺という、非業^{ひごう}の死だった。

(キーラ王妃と魔族の関係……)

それを聞けばルーナの疑問は晴れるだろうが、一方で知るのが怖い。そんなルーナの内心を嘲笑^{あざわら}うかのように、バルナドは語る。

「王妃……キーラは、もともと王の妃候補だったのですよ。ご存知でしたか？」

「えっ、キーラ王妃はベルフーア公爵と婚約していたんじゃない——」

反射的に答えてしまった後、バルナドの思惑に乗ったことに気づき、ルーナは顔を顰^{しか}める。

とはいえ、この質疑応答の時間は彼らの気まぐれだ。それが終われば、ルーナがどのような目に遭^あわされるのかわからない。

だが、彼らの狙いを探り、そして逃げ出す算段を見出すためには、この時間がルーナにとってチャンスでもあった。

彼女は、恐怖と焦り、その他もろもろの感情を抑え込み、バルナドの次の言葉を待った。

「そうですね。それもあってキーラを王妃に選ばず、王は自分の愛する者——クロエ妃を娶^よった。キーラ王妃も恋人であった公爵との婚姻に納得し婚約した……いや、一度は納得しましたが、すぐに我に返った——ですね。まもなく彼女は、己^{おのれ}の未来が、たかが公爵夫人だということに気づいたのです。キーラにとって、それは受け入れがたいことだった。この国で最高位の女性でなければ満足できなかったのですよ、彼女の肥大したプライドというやつは。おそらく王と結婚したクロエ妃を見て、その座が欲しくなったのでしようね。公爵夫人では国王妃には首^{うき}を垂^たれなければなりませんから。そして思ったわけだ。恋人も、権力もすべて手に入れればいいとね」

「まさか……」

哑然とするルーナを余所に、ネイディアが続ける。

「そう。お母様はね、まず手始めに前王妃に死んでもらうことにしたの。その辺については、お祖父様のネグロ侯爵も喜んで協力してくれたみたいよ。そして次に願ったのは、もちろん自分が王妃になることだった」

「じゃあ、クロエ様は……」

「お母様に暗殺されたつてわけ。これつてお父様も知らないんじゃないかしら？ 島国の珍しい毒でまったく痕跡を残さず、心の臓の発作に似た症状が出るんですつて。お母様がよく自慢げに話していたわ。でも滑稽よね。自分もまた毒殺されたわけだし」

「そんな……」

国王の前妃であり、リュシオンの母である、クロエ王妃。

リュシオンがまだ幼い時に亡くなっており、その後、後妻として娶られたのがネイディアの母キーラだった。

しかし、ルーナが知っていたのは、キーラとベルフア公爵が恋人同士で、国王との婚姻によって引き裂かれたというもの。

ネイディアの言葉を信じるならば、恋人同士だったのは確かだが、権力によって無理に引き裂かれたわけではないようだ。

「お父様は次の王妃を拒んだけれど、その候補もたくさんいたのよ。でも、候補を全員害してはすぐにばれてしまうでしょう？ それでね、お母様は考えたの。その結果が彼、というわけ」

ネイディアは、そう言つてバルナドを手で示す。

バルナドはそれに大袈裟なお辞儀で応えようと、後を継いだ。

「キーラ王妃は、私と契約を結びましてね」

「あなたと？ 王妃様はあなたが魔族だと知っていたの？」

ルーナが尋ねると、バルナドは肩を竦める。

「いいえ。優秀な魔法使いと思つていたようですよ」

「魔法使い？ それなら契約というのは、誰かを襲う企てだったというの？」

「それも否定はしませんが、そんなことではありませんよ。そうですね、ここまで話してしまったのですし、少しだけ教えて差し上げるのも親切ですかね？」

バルナドは、ネイディアの方に顔を向けて尋ねる。それに応え、ネイディアは可愛らしく笑つて首肯した。

それを認めて、バルナドはルーナに向き直る。

「キーラ王妃には、我らの協力をしてもらおうという契約をしたのですよ」

「協力？ それはいったい……」

ルーナは、困惑を隠さずにつぶやいた。

キーラに協力を頼む。

考えられるとすれば、クレセニアという国に混乱を生む、というものだ。

だが、魔族にとって権力にたいした価値はないはずだ。それとも、何か他に考えがあつてのこと

なのか。

どちらにせよ、ルーナにはその答えがまったく予想できなかった。

黙り込むルーナに、バルナドが片眉を上げる。

「おや、どういふことか予想がつきませんか？」

「予想もなにも、意味がわからない」

ルーナがぶっきらぼうに言うのと、バルナドは大きなため息をついた。その馬鹿にした仕草にムツとするものの、ルーナは無言を貫く。

(下手に自分の考えを言うより、無知と思われても相手の話を引き出す方がいい)

ルーナの意図を見越しているのか、バルナドはわざとらしく肩を竦めた。

「まあ、貴女ごときでは、答えに辿り着くなど死ぬまで、否、死んでも無理でしょう」

「それは言えるわね」

もつともだと、バルナドに呼応するネイディア。一方ルーナは、努めて平静を装い続ける。

そんな彼女の反応が面白くなかったのだろう。ネイディアは、バルナドを不満げな顔で見た。

「ああ、つまらないわ。ねえ、もう何も言わないで殺してあげたら？」

「おやおや。それでもいいですが、後悔しませんか？ まだ何も教えていないでしょう？ きつと貴女のことを知らせてやれば、反応せずにはいられませんよ」

「それも一理あるわね」

ネイディアはコクリとうなずくと、ルーナにニヤリと笑ってみせた。

「じゃあ、さっきの質問とは別だけど、あなたにとっておきの秘密を教えてください。きつと驚くことになるわよ？」

「驚く？」

ルーナは、ネイディアを訝しげに見た。

彼女が魔族と結託している。それだけですすでに十分驚きなのだ。

キーラが、彼らと何を契約したのか。その内容はわからないものの、恐らく自分の利になるためのこと。

それが、敵となりうる者の排除であろうことは、想像に難くない。また、魔族側としては、キーラが王妃になったあかつきに、その立場を利用して自分たちの思うように国や人を動かしてやろうというものなのだろうと、ルーナは思っていた。

確かにそれらは脅威ではあるが、驚きとは違う。

しかし、ネイディアの様子は、まさに子供が驚きを期待してウキウキしている、そのものだ。

「いったい何を……」

聞きたくない。何故かもわからない予感に苛まれつつ、ルーナは声を絞り出す。

怯えを隠せないルーナの様子が気に入ったのか、ネイディアはさらに笑顔を輝かせた。そして、もつたいふりながら口を開く。

「ねえ——わたくしもまた、魔族なのよ」

一瞬の沈黙。

ネイディアの言葉は、確かにルーナの耳に届いた。しかし、その意味を理解するのに時間を要したのだ。

「……そんなバカな！」

ルーナはあまりにも信じ難いネイディアの告白に、思わず声をあげた。

ネイディアが魔族。

魔法に長け、身体能力も高い魔族という生き物。

何度も対峙したバルナドやラウルを見れば、語り継がれてきた魔族の特性が、まぎれもない事実だと証明された。

だが、これまでのネイディアは身体が弱く、魔法も使えなかった。

人としてすら、弱者に位置付けられる彼女が、魔族であるなどあり得ないことだ。

「おや、否定されてしまいましたね」

「しょうがないわ。時が来るまでは確かにわたくしも『人』だったもの」

「時？」

思わずルーナが訊き返すと、ネイディアはクスリと笑う。

「そう。脆弱な人の中でも、さらに貧弱な身体。母体があんな女では、器がそんなものになるのも道理よね」

「まったく、予想以上の欠陥品でしたな」

「本当に。時が来る前に死んでしまうかもと危惧していたのよ」

「ご冗談を」

ネイディアとバルナドは、ルーナがいないかのように軽口を叩き合う。

（器？ いったいどういうことなの……？ 彼女は何を言っているの？）

キーラが魔族と結んだ協力関係。器。魔族だという告白。

ネイディアたちの話は、次々とルーナに謎を提供し、混乱させるだけだった。

「さて、種明かしはこれくらいで十分じゃない？」

「そうですね」

「あとは自分で考えることね。あら、でもそんな時間は永遠に來ないのかしら。まあ、わたくしにはどうでもいいわ」

勝手にお開きを宣言したネイディア。

まるでパーティの終了を告げるかのようにあっさりとしているが、ルーナにとっては生死にかかわることだ。だが、それを指摘しても、彼らが気を変えとは思えなかった。

「……わたしをどうする気？」

もはやネイディアは、明確な敵だ。

丁寧な言葉遣いをやめ、ルーナはネイディアを睨みつける。

「どうする？ 決まっているじゃない。あなたはわたくしにとって邪魔でしかない」

ネイディアはそう言うと、おもむろに片手をルーナに向けて伸ばした。声は出る。表情も動く。だが、相変わらずルーナの身体は凍り付いたように動かない。(ここで死ぬの?)

恐怖はもちろんあるが、ルーナはそれ以上に悔しさを感じて唇を噛んだ。「じゃあ、さようならルーナ。お友達ごっこもなかなか楽しかったわよ」言い切った後、ネイディアは小さく何事かを囁く。

その言葉は、ルーナの耳には届かなかったものの、魔法語なのだろうと察しはついた。その予想通り、次の瞬間、彼女に向けて黒い影が飛んでくる。

(十八で死んだ千幸より、もっと早く死ぬことになるなんて……)

諦観と恐怖。そして悔しさがルーナを満たすが、何も打つ手はない。

鋭く伸びた影が、ルーナに届く。

そう思った刹那、パアンツと何かが爆ぜるような音が鳴り響いた。

「なんですって!?!」

思わず目を閉じたルーナの耳に、信じられないと言わんばかりのネイディアの声が届く。

(え……?)

ルーナは、恐る恐る目を開いた。

ネイディアから放たれた黒い影はどこにも見当たらず、自身を見下ろしても傷らしい傷もない。

(攻撃、受けたよね?)

確かにネイディアから攻撃魔法が放たれた。

身動きもできないルーナに、それを避けるのは不可能だ。

「バルナド! どういうことなの!」

ネイディアは、同じように驚いているバルナドを責める。

「わかりませんな。〈防御魔法〉ではないようですが……」

そこで言葉を途切れさせたバルナドは、短い魔法語をつぶやいた。

彼が手を伸ばすと、その手のひらから黒を帯びた炎が現れる。次いでそれは、真っ直ぐにルーナに襲い掛かった。

「いやっ!」

襲い掛かる炎を避けようとしても、ルーナの身体は未だに動くことはできない。しかし、炎は容赦なく彼女を焼こうと近づいてくる。

今度は目を閉じる間もなく、炎がルーナの目の前まで迫った。

刹那、白い光がルーナから放たれ、炎と接触する。すると、先ほどと同じように、パアンツと耳の奥に直接響くような破裂音が響き、炎が細かく散って消えた。

「な、何……?」

ルーナは、今し方起こった現象に驚きの声をあげた。

間違いなく、彼女は自分に〈防御魔法〉の類いなどかけていない。それどころか、魔法を施した護符や魔道具すら持っていなかったのだ。

「護り、か」

魔法を放った手を顎にやり、バルナドがつぶやく。するとネイディアは、訝しげな表情で彼に尋ねた。

「どうということなの？ あれは何？」

「おそらく、いつも彼女の傍に侍る守護者共の護りでしょう。防御に特化させることで、私たちの魔法を防ぐことができた、といったところですか」

「〈拘束〉の魔法は弾かれなかったじゃない！」

「あまたの魔法ではなく、純粹に攻撃魔法にのみ反応するようにしているのでしょう。だからこそ、これほど高い防御力を作り上げることができたのかと」

バルナドの説明に、ルーナも先ほどの現象を理解した。

防御対象を特定の攻撃に絞ることで、通常以上の効果を発揮する魔法がある。

おそらくルーナに施された護りも、『生命を脅かす攻撃のみ』に反応するように特化している。そのため、拘束されるだけの魔法には反応しなかったのだ。

（ありがとう、皆……！）

今ここにいない守護者たちに、ルーナは心の中で感謝をする。

実際、そこまで特定し、強化された護りだったからこそ、魔族という圧倒的強者の攻撃をも跳ね返せたのだ。

一方、ネイディアとバルナドは、ルーナへ攻撃できないことに苛立っていた。

「なんなのよ、もう！」

「忌々しい守護者共ですわね」

そう愚痴ると同時に、バルナドは再度攻撃を試みる。今度は氷の槍だ。しかし、結果は先ほどと同じ。

ルーナに施された護りは、魔族の強固な攻撃を防ぎきってみせた。

「ああ、本当に忌々しいわね、あなたって存在は！」

「きゃっ」

ネイディアに乱暴に髪を引っ張られ、ルーナは悲鳴をあげる。

「そうだわ、魔法じゃなくて刃物はだめかしら？」

「おそらく結果は同じでしょうね。生命の危機という点で同様ですから」

「チッ」

ネイディアは小さく舌打ちすると、握ったままのルーナの後ろ髪を下に引っ張る。強制的に顔を上げさせられたルーナの目には、涙が浮かんでいた。

それを見て、少しだけ気が済んだのだろう。ネイディアはルーナの髪から手を離れた。

「ねえ、バルナド。これ、どうしたらいいかしら？」

「そうですね……」

バルナドはしばらく思索した後、ネイディアに近づく。そして身をかがめて、彼女の耳に何事かを囁きかけた。

「——というのはどうでしょう？」

「へえ……それは面白そうね」

バルナドの提案を聞き、ネイディアは楽しみに唇を舐めた。

（なんだか、すごく嫌な予感がする）

内容は聞こえなかったが、ルーナにとつてまったく楽しくはない事態が起ることだけはわかる。

「では、仕上げは私が」

「ふふっ、上手くやってちょうだい」

「お任せを」

バルナドは請け合くと、ゆつくりとルーナに近づく。

相変わらず身動きできないルーナは、やすやすと魔族を近づかせるしかない。

「大丈夫、傷つけはしませんよ」

胡散臭い笑顔で、バルナドはルーナに告げる。

（誰が信じられるっていうの！）

数分前には、殺意を向けられていたのだ。ルーナのこの心の声に、誰も文句は言えないはずだ。

「あつはは、確かに、傷つけはしないわねえ。傷つけは。どう？ 安心？」

「安心なんかできるはずないでしょう！」

思わず言い返すルーナに、ネイディアはまたしても哄笑する。

「そうよね。あはは。確かに死にはしないけど、大変な目には遭うかもねえ」

不安げなルーナの眼差しを、ニツと笑って受け止めるネイディア。彼女は、楽しげな様子でルーナの頭に手を置く。そして、低い声で魔法語を唱え出した。

長い、長い言葉が、ネイディアの口から紡がれる。

口の中でつぶやくように唱えられたため、ルーナにははっきり聞こえない。ネイディアがどんな魔法を行使しようとしているのか見当もつかなかった。

だが、魔法語は長いほど威力や効果が大きく、高度なものとなる。

詠唱の長さから、ネイディアがかけようとしている魔法が、ルーナにとつてとても危険なものだということも察せられた。

（いったい、どんな魔法をわたしにかけるつもりなの……）

思い浮かぶのは、リカル王国で操られていたアディンたち。

意に反して操られ、ルーナたちを害そうとしてきたのだ。

絶大な魔力を持つ魔族を名乗るネイディアから、本気で精神干渉の魔法をかけられれば、果たして抵抗できるかルーナにも自信がなかった。

やがて、ネイディアの長い詠唱がようやく終わる。

その途端、ルーナを覆うように、黒い霧が彼女を包み込んだ。

（これは……）

身構えたルーナだが、身体に変調はない。

霧もすぐに消えてしまい、一見するとなんの変化もなかった。

「どうやら成功のようね」

「ええ、さすがはネイディア様。完璧と言っていいでしょう」

「そう。じゃあ、あとは舞台へ上げるだけね」

「それで開演というわけです」

ネイディアとバルナドの不穏な会話に、ルーナは我慢できずに口を挟む。

「わたしに何をしたの!？」

「残念ながら、質疑応答の時間はおしまいなのですよ」

「あれだけ色々教えてあげたんだから、それで満足しなさいな」

ルーナの睨みなどこ吹く風、バルナドとネイディアは、からかうように告げた。

「では、ネイディア様。お願いしますよ」

「任せておきなさい」

ネイディアは髪を払いながら言うと、胸の前で手を組んだ。

次の瞬間、ルーナの足元に大きな魔法陣が出現する。

「え、な、何!？」

動揺する彼女を余所に、魔法陣は光を四方八方にまき散らす。

「じゃあ、ルーナ。せいぜい絶望するといいわ」

「身体の自由は取り戻せているはずですよ。それでは、また会えることを楽しみにしていますよ」

啞然とするルーナの前で、ネイディアとバルナドは銘々に言葉をかける。

その間にも魔法陣の光は強くなり、やがてルーナの全身を包み込んだと思った瞬間、ふっと消えた。すると驚くことに、光と共にルーナの姿も消えてしまっていた。

「上手くいったようね」

「さすがです」

「ふふふ」

残されたのは、魔族と高貴な少女のみ。

ルーナが消えた後、二人は高らかな笑い声をあげたのだった。